

一般社団法人日本社会福祉学会
第68回秋季大会(オンライン大会)報告

全国大会運営委員会委員長 岩崎 晋也(法政大学)

第68回秋季大会は、新型コロナウイルスの流行にともない初のオンライン開催となりました。大会テーマは「新型コロナウイルスがもたらしている生活問題に立ち向かう」とし、2つのオンライン・シンポジウムと、1つのオンライン・ワークショップ、それとE-ポスター発表により構成され、9月12日(土)から13日(日)の2日間で開催しましたシンポジウムとワークショップ企画への延べ参加者は、約1,200名でした。

9月12日の10時からは留学生と国際比較研究のためのワークショップ「社会福祉系大学院留学生の研究と研究指導について考える—国際比較研究の視点から—」を開催しました。コーディネーターは阪口春彦氏(龍谷大学短期大学部)と和気純子氏(東京都立大学)でした。まず留学生を指導した立場として、埋橋孝文氏(同志社大学)と野口定久氏(日本福祉大学大学院)から報告がなされました。次に留学生として学んだ立場から、茆海燕氏(城西国際大学)と孔榮鍾氏(大阪商業大学JGSS研究センターPD研究員)から報告がなされました。

9月12日の13時からはスタートアップ・シンポジウム「研究者としてのキャリア形成について考える—初期キャリアをどのように形成していくか—」を開催しました。司会は、保正友子氏(日本福祉大学)でした。発題者は、二渡努氏(東北福祉大学)、鈴木浩之氏(立正大学)、本田優子氏(大阪労災病院治療就労両立支援センター)、小高真美氏(武蔵野大学)であり、現場経験を経ての研究や子育てをしながらの研究など、それぞれの立場から初期キャリア形成の工夫や課題が報告されました。

9月13日の13時からは学会企画シンポジウム「いま福祉現場で何がおきているか—新型コロナウイルスがもたらした影響」を開催しました。この新型コロナウイルスがもたらす生活問題や生存の危機に立ち向かっている現場の方にシンポジストとしてご登壇いただき、それぞれの方々の取り組みを共有しディスカッションしました。シンポジストは、勝部麗子氏(社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長)、稲葉剛氏(一般社団法人つくろい東京ファンド代表理事、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科客員教授)、清水康之氏(特定非営利活動法人自殺対策支援センターライフリンク代表)、小河光治氏(子どもの貧困対策センター公益財団法人あすのは代表理事)でした。コメンテーターは木原活信氏(同志社大学)、コーディネーターは岩崎晋也(法政大学)でした。

3つの企画とも、Googleフォームを使って質問を受け付け、一定の参加者との双方向性を確保することができました。また情報保障として、筑波技術大学若月大輔准教授が管理されているcaptiOnlineを利用させていただき、要約筆記者に依頼して字幕画面を提供しました。

参加者アンケートの結果からは、いずれの企画も高い満足度が得られました。最も多くの方が参加された13日の学会企画シンポジウムは、非常によかったが68.6%、まあまあよかったが28%であり、両方をあわせると96.6%となり、大変高い満足度が得られました。自由記述を見ても、新型コロナ下における新しい取り組みの実態や課題がよく分かったという記述が多く、多くの方にとって関心のあるテーマだったのだと思います。

また大会開催から1か月間、学会ホームページ上でポスター発表を行うE-ポスター発表も開催しました。会員の自由研究報告については、オンライン分科会の開催も検討しましたが、分科会数が多

く、司会者や報告者の通信環境の安定性や運営の統一性など、短期間の検討では解決できない問題が多く、E-ポスター発表で行うことにしました。

E-ポスター発表には160件の発表申込がありました。理事による査読の結果、学会が指定する発表形式に適合していない発表について修正を求め、最終的に18件が発表を取り下げ、2件を発表不可とし、140件の報告がなされました（韓国社会福祉学会からの推薦報告2件を含む）。E-ポスター発表公開後、参加者から14件の質問がなされ、発表者からの回答がHP上で公表されました。新型コロナウイルスの影響で、様々な研究活動が停滞する中、学会として研究発表の場を最低限確保できたのではないかと思います。

またアンケートからは、今後もオンライン企画への要望が出されました。特に、子育てをしている会員や地方在住の会員から、いつもはなかなか大会に参加できないが、オンライン開催だったので参加できたという声や、研究費が少ない研究者にとって交通費や参加費がかからないことの利点を指摘する声がありました。また、今回は約1/3が非会員であり、20代の参加者が多かったことも特徴です。参加費が無料ということもあったと思いますが、SNSを通して本企画を知ったという参加者も多く、新しい層の参加があったと思います。もちろんオンライン大会は、分科会で対面して議論できたり、新しい研究者との出会いの場がもてないことなどの限界がありますが、オンライン大会の利点も生かすハイブリッド型の大会運営を今後検討していきたいと思います。

多くの方に大会運営にご協力いただきありがとうございました。